

ている。幕府翻訳版は巻外に折本の「図」一帖がついている。「図」の絵が非常に精密で、書写するのに手間がかかるためか備えていない写本が多いが、大野版では『海上砲具全図』として独立して刊行されている。

翻訳の際に、幕府がメートルを尺に換算したり、宇都宮三郎（日本の化学工業界の先駆者）が本書を読み、火薬を知るための基礎として化学を志すなど、後の日本に様々な影響を与えた。また、カルテンの原書は、江戸時代末期の砲術家である高島秋帆や、江戸時代後期の思想家佐久間象山が所持していた。宇田川榕庵の担当した1、2編の自筆稿本2部3冊が早稲田大学図書館に収蔵されている。

■ 作者

作者はJ.N.カルテン。オランダのメデムブリッキ海軍兵学校砲術教官。

訳者・校者・閲者は写本の冒頭に、6名の名が明記されている。このうち品川梅次郎については不詳。その他5名は以下のとおり。

宇田川榕庵（1798-1846）。江戸末期の蘭学者。蘭語に精通し、西洋諸科学に才を発揮し、西洋自然科学の導入に大きく貢献した。江戸参府中のシーボルトと互いに書物などを贈答し交誼を結んだ。

箕作阮甫（1799-1863）。蘭学者。日本最初の医学雑誌『泰西名医彙講』など、著訳書は99部160冊にのぼる。竹内玄同（1805-1880）幕末の洋方医。後に徳川家定の侍医。杉田成卿（1817-1859）。杉田玄白の孫。麻酔という言葉葉を造語し、日本初の吸入麻酔の実施を行った。杉田立卿（1786-1845）江戸後期の蘭方医。杉田成卿の父。

📖 本文を読む

<版本>

『海上砲術全書』1-28巻、『海上砲具全図』カルテン著 宇田川榕庵ほか
訳 越前大野藩 1854 [559.1/23/1] - [559.1/23/27-28]、[559.1/22]

📖 参考文献

『江戸の化学』奥野久輝著 玉川大学出版部 1980 [430.2/28]

『国語語彙史の研究 24』国語語彙史研究会編 和泉書院 2005 [814/27/24]